セーフティネット化する移民のスポーツ空間： 群馬県大泉町のブラジル・フットサル・ センター（BFC）の事例

植田 俊¹⁾ 松村 和則²⁾

Shun Ueta¹ and Kazunori Matsumura²: Sport space as a safety net for immigrants: A case study of Japanese-Brazilians at Brazil Futsal Center in Oizumi, Gunma, Japan. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 58: 445-461, December, 2013

Abstract : This study explores why immigrants creation of an individual “ethnic enclaves” and practice sport separately.

In previous studies, 3 sociological arguments relating to this issue have been cited: 1) sport as a cause of “failure to assimilate”, which threatens the livelihood of immigrants, 2) sport as an effective means of sustaining “ethnicity”, and 3) sport as an outcome of “disentitlement of the right to enjoy sport”, as a result of the difficulties faced by immigrants in everyday life. However, these arguments have focused on setting the units of “participating in sport” and “encountering daily difficulties” for the “individual”. Therefore, these arguments do not capture the reality of daily life for immigrants, which involves prolonging their period of residence and establishing their families, and the fact that efforts to resolve problems cannot be made by “individuals” but by families, peer groups and communities. This present study tried to grasp this issue of solving the daily living problems of immigrants through sport by focusing on a group of families and communities that participate in sport.

A case study was conducted at the “Brazil Futsal Center” (BFC) located in Oizumi, Gunma, Japan. The findings revealed that for Japanese-Brazilians who used the BFC, one of the most important issues was “child-minding”. In addition, separation of their children from their home culture in view of the lack of any “Brazilian school” was another issue; one factor related to this was low family income. However, the Japanese-Brazilians dealt with these issues creatively by using the sport space of the BFC. For Japanese-Brazilian families, the BFC is an important focal point where many generations who have embodied their home culture gather.

From this case study carried out at the BFC, it is clear that the creation of an “ethnic enclave” was not the result of “disentitlement of the right to enjoy sport”, but rather an attempt to restructure the daily life of immigrants through sport.

Key words : ethnic enclave, embedding in life, settlement-oriented, child-minding

キーワード : エスニック・エンクレイブ, 生活化, 定住志向, 育児

I. はじめに

プラザ合意による円高や、バブル経済をもたら

した米国の赤字解消をめざした日本の「閉鎖性」を批判する外圧は、スポーツ施設を中心としたリゾート開発の圧力(内需拡大)となって顕在化し、3K と呼ばれる労働現場での労働力不足を加速し

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

2) 筑波大学体育系
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

連絡先 植田 俊

1. Graduate School of Comprehensive Human Sciences,
University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba city, Ibaraki 305-8574

2. Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba city, Ibaraki 305-8574

Corresponding author s0930478@u.tsukuba.ac.jp

た。1980年代後半から顕著となる日系ブラジル人^{注1)}の増加はその1つの現れである。入管法改正(1990年6月)によって、彼らには日本での就労に制限のない「定住者」という在留資格が付与された。それ以来、彼らは安価で使い勝手のよい合法的な単純労働力として定位されてきている。こうした、日本における日系ブラジル人の位置づけをめぐるのは、まず彼らの雇用条件等の「労働局面」^{注2)}が問題化されたのを皮切りに、現在では、彼らの滞在が長期化したことで、家庭生活や子孫の教育といった「生活基盤形成局面」^{注3)}において日系ブラジル人が直面する困難が様々に指摘されてきている(梶田ほか, 2005, p. 11)^{注4)}。

こうした、移住先での生活問題が浮上する中、ブラジル人が定住化しつつある当該地域においては、この問題解決に資する有効な手段としてスポーツが位置づけられたと我々は考える。つまり、彼らが日本の法令や生活習慣を理解し当該地域社会へ適応すること、また彼らがどのような価値観を持って暮らしているのかをホスト側(=日本)の人びとが知ることは、暮らしの向上に資すると行政的に理解された^{注5)}。そのような文脈の中で、誰にでも開かれたものであるべきスポーツは、異文化接触・交流の絶好の機会を提供でき、ひいては「国際相互理解を促進」(文部科学省『スポーツ基本法』)するものと考えられてきた^{注6)}。

一方、英語圏を中心としたスポーツ社会学領域においては、移民の顕在化に付随して起こる「生活基盤形成局面」における問題と移民のスポーツ実践の関係は、これまで主に移民がスポーツに参加できる条件をいかに整えられるか、また多様な移民がスポーツの場で入り混じる中でエスニシティの保持がいかに保障できるか等が「権利」の視点から問われてきた(Ruble and Shaw, 1991; Tirone and Pedlar, 2000)。

しかし、実際の現場では、スポーツは多様な移民が参与する場^{注7)}とならないばかりか、むしろ同じエスニシティの人びとで集まりスポーツを実践する傾向が指摘されている(Juniu, 2000; Stodolska, 1998; Walseth, 2008)。異文化理解という理念は遠ざかり、交流や接触の場にすらス

ポーツがならない事態が報告されているのである^{注8)}。では、なぜ移民の暮らしの改善に資するとされ、かつ移民へと開かれているにも関わらず、スポーツ実践がエスニシティによって分断されるという報告が相次ぐのか。本稿は、エスニシティにもとづくスポーツ実践の分断の問題を解明することを目的とする。しかし、こうした英語圏を中心としたスポーツ社会学領域における研究課題をにらみつつも、日本の「現場」で生起する彼ら自身の生活課題へと研究対象を拡大したフィールドワークを敢行する。その意図は、欧米の研究成果から導き出されたフレームで現実を「切断」しようとするのではなく、当該生活空間で生起する問題に肉薄し、研究課題を我々自身で再検討しようとする点にある。

II. 研究史と分析視角^{注9)}

1. 「移民の同化とスポーツ」論

移民によるスポーツ実践がエスニシティにもとづいて分断される面をめぐるのは、多くの移民を受け入れてきた経験のある「多文化社会」である北米を中心に研究が蓄積されてきた。1960年代後半から1970年代初頭に成立した北米のスポーツ社会学において、当時隆盛していた「公民権運動」や「アフーマティブアクション」^{注10)}を背景として、人種・民族問題とスポーツの関係が積極的に問われてきた(Coakley, 1987)。そこでまず、問題とされたのはスポーツがもつ人種・民族関係改善へ貢献するという「信念」の是非であった。コークリー(1982)によれば、1960年代半ば以降のアメリカでは、1968年のメキシコ五輪での陸上競技における黒人選手の活躍や野球のメジャーリーグに黒人選手が登場し活躍する姿が、「スポーツは肌の色や民族性よりも能力に基づいて活躍できる分野」だと人びとの間で見なされるようになり、「人種間の友好な関係と民主主義の精神を育てるものとして称賛されていた」(コークリー, 1982, p. 254)。こうした「信念が主として現実的な機会に基づいているのか、それとも、はかない夢に基づいているのか」(コークリー,

1982, p. 255) を事例調査に基づいて検証することが急務の課題であり、それを担うのが「移民のスポーツ研究」であると論断された。

アメリカのミルウォーキー州における民族系サッカークラブの調査から、スポーツ参与は移民の同化を促進しないと述べたのはプーリー (1988) である。ゴードン (2000) の提唱した同化理論^{注11)}を用いて分析した結果、同化傾向は部分的には見られたが (市民, 行動受容, 態度受容), 肝心の「構造的同化」「文化同化」「婚姻同化」はほとんど進んでいないことが分かった。むしろそれは、同じエスニシティごとに作られるチームの「ポリシー」によって妨げられ、内集团的価値や行動様式が強化されており、他集団との接触は競争関係に限られていた。また、ドイツにおけるトルコ移民による自民族スポーツへの参加と同化の関連を調査した Fronger (1985) も、自民族スポーツへの参加/非参加は、トルコ移民の同化の度合いに影響を及ぼすことはないとし、スポーツに関する伝統的な考え方を持ち続けていることと自民族スポーツへの参与との間の相関を見出し、自民族スポーツへの参与は移民同化を進行させないと指摘した。

一方、カナダのトロント市中心部のイタリア系移民のサッカークラブの事例から、スポーツを通じて移民のエスニック・アイデンティティやそれにもとづく紐帯・文化が次第に消失していくと論じたのは McKay (1975) である。彼は、クラブの責任者とコーチ等へのインタビュー調査から、当初イタリア系移民の選手で結成されたクラブであったが、クラブの維持・継続の必要のためにクラブの規約を改定し非イタリア系の選手もメンバーにリクルートしたことで、エスニック・アイデンティティとそれにもとづく結束の強化よりも、移民間の接触が促され同化が進行したと結論した。また、カナダのオンタリオ州ロンドン市におけるサッカークラブの調査から、Day (1981) もサッカーがポルトガル系、ドイツ系、ポーランド系、イタリア系移民の同化を促進していると述べている。移民政策がカナダへの移住を規制するようになると、同じ出身国の選手しか在籍してな

かったクラブは他国出身の選手を集めるようになっていった。それに伴い、クラブが多文化化することによって様々な場所での会話には英語が使用されるようになり、カナダへの言語的同化が進んだと結論づけた。

2. 「移民の文化変容とスポーツ」論

Allison (1979) は、プーリーらの「同化研究」を「メルティングポット論」と呼び、そこにおいては、①移民の同化が時間の経過とともにあまりにも予定調和的に進むと考えられていたこと、また、②移民の同化の進行は彼らの生存をより改善すること、そして③研究者たちは、移民の「同化」は進むべきであるという考えを前提にしていたことに異議を唱えた。「同化研究」はエスニシティを「ホスト社会の一員になるのに逆機能するもの」(Allison, 1979, p. 53) と捉えており、エスニシティにもとづく分断は「同化の失敗」とされてきたという。しかし Allison (1982) によれば、エスニシティごとに異なる価値基準 (「競争」「協働」「成功」の捉え方) によって、スポーツの形式のあり方それ自体に変化が加えられて実践されている。すなわち、移民がスポーツの形式を変容させ作りかえる際、自文化の伝統に価値が置かれており、移民はエスニック・アイデンティティや結束をより強めていた。こうした「スポーツをいかに変えていくか」(Allison, 1982, p. 173) という観点を導入することで、移民がホスト文化と自文化との違いを表出し、独自性 (多元性) を維持していることが明らかとなると主張する (=文化多元主義論)。また Cheska (1984) は、従来の研究の問題点を「ホスト国の文化 (スポーツ) を行うようになった」という行為レベルの変化という表層的な部分しか捉えなかった点にあると述べ、移民が自分たちのスポーツ実践にいかなる「意味」を見出しているかを捉えるべきと主張する。彼女は、アメリカ南西部におけるヨーロッパ系の人びとと土着民 (ナバホ人 Navajo Indians) とが約 450 年もの間接触を続けてきたにも関わらず、スポーツにおいては互いの文化の差異を示すに留まっているのはなぜかと問うた。ナバホ人は確かに

欧米のスポーツを好んでプレーする傾向にあるが、しかし、欧米のスポーツ文化とナバホ人の文化は両立可能であり、文化消失にスポーツが機能することはない。さらに、欧米スポーツの実践を通じて、自文化との違いを認識することで、ナバホ人は民族的境界 ethnic boundary を保持しているのである。

3. 「移民のアイデンティティとスポーツ」論 と「移民のスポーツ参与条件」論

こうした、文化の「変化」を捉えその積極的意義を見出そうとする研究は、その後、大きく分けて2つの方向へと分かれて展開していく。

1つは、スポーツやレジャー活動が移民のエスニシティ保持の手段となるとの視点から、スポーツの場におけるホストとゲストのミクロな相互作用のありようを論じるものや、それを通じて個々人のエスニック・アイデンティティがいかに変容するのかを明らかにする「移民のアイデンティティとスポーツ」論である (Rublee and Shaw, 1991; Tirone and Pedlar, 2000)^{注12)}。例えば、Rublee and Shaw (1991) は、ラテンアメリカからカナダへの女性移民を事例に、彼女たちが集うスポーツの場が「移住先の国で、母国にいるかのような安心感を得る」ことや「自分たちは移住先の社会へ参画する能力を保持している」(Rublee and Shaw, 1991, p. 135) といった心のゆとりを与えることを明らかにしている。彼女たちが移住先の社会で直面する、言語の問題、失業、文化的分業による社会的上昇の困難、地理的移動の困難の問題は、彼女たちの移住先での生活の質を著しく低くさせているが、彼女らにスポーツは心のゆとりを与えている点で重要であると結論づけている。

Tirone and Pedlar (2000) は、移民たちのスポーツ実践のあり様を分析する要素として移民たちのアイデンティティ形成に注目する。移民たちが、①家族の期待、②移住先における家族以外の諸社会関係、③移住先の社会からの同化圧力のなかでどのようにアイデンティティを構成し、それがいかにレジャー・スポーツの場面において顕在

化するかを、南アジアからカナダへと移住した移民第2世代の若者たちの事例で検証した。彼らは家族、友人等の社会関係、ホスト社会のそれぞれから相反する期待を受けており(民族的伝統の維持、ホスト社会への同化)、双方の社会からの期待に応える必要から、移民-ホスト社会間でアイデンティティ形成のバランスを保っていることを明らかにした^{注13)}。

個々人のアイデンティティの形成過程やその中で揺らぎを丹念に追うこうした研究は、移民にとってスポーツが自分たちのエスニシティを確認できる数少ない場として重要であることを明らかにし、エスニシティにもとづく分断を積極的に評価した。しかし、スポーツを手段として解決が目指される移民の背負う生活課題とは、「エスニシティの保持・確認」にはとどまらないはずである。「移民のアイデンティティ」論はスポーツへ参与する移民が一体いかなる条件のもとにあるのかという点を問うてこなかった。

それに対して、エスニシティの確認の手段となるスポーツやレジャーに移民が参与する際にいかなる障壁に直面するのかを問うたのが「移民のスポーツ参与条件」論である (Juniu, 2000; Stodolska, 1998)。この議論は、移民のスポーツ参与とその背景にある移民の日常的課題との関係を問う。

例えば、Stodolska (1998) によれば、移民はある特徴的な困難を移住後に経験するという。それは、①言語上の困難、②ホスト国の生活様式への適応の困難(ホスト国のスポーツ文化への適応困難も含む)、③マイノリティであるという地位に由来する困難である。さらに、加えてホスト社会の人のびとも経験する共通の困難も上乗せで背負うことになるのである。そのため、こうした困難に基づく①時間の欠如、②経済的余裕がない等の制約は、ホスト社会の人のびと以上の困難となって移民のスポーツ参与を規定・制限するという。また、Juniu (2000) も、移民のスポーツ実践は時間と金銭面の欠如にかなり厳しく規定・制限されているといい、特に①残業、②家事、③家計上の制限に顕著に見て取れるという。

4. 「移民のスポーツ参与条件」論の限界

「移民のスポーツ参与条件」論は、移民たちのスポーツを通じたエスニシティの保持・変容は、ある程度制約された中で行われていることを明らかにした。すなわち、ホスト社会で暮らす移民のスポーツ実践は、言語の困難、失業、文化的分業による社会上昇の困難、物理的移動の困難といった「移民」であるがゆえに背負わざるをえない諸問題に規定されているという点である。「参与条件」論は、移民が日常的に背負う諸問題と彼らのスポーツ実践の関係の分析の重要性を示唆したところに意義があった。

しかし、従来の議論では、スポーツ参与を阻害する条件として移民の日常的困難は検討されてきたが、その日常的困難に対して移民がいかに向き合い対処しているかということとスポーツ実践の関係は問題にされてこなかった。「スポーツ参与の阻害」を問題にする議論の前提には「権利の保障」という視点がある。つまり、「参与条件」論はエスニシティにもとづくスポーツ実践の分断を、スポーツに参与する「権利」が阻害された状況に他ならないと捉え、「権利の保障」を主張するのである。しかし、より重要なのは「スポーツ参与の阻害」ではなく「移民の日常的困難」の方に目を向け、移民がどのような手段で困難解消を目指しているかという問題を考えることである。なぜならば、異なるエスニシティの人びとにとって「権利」の要求は社会文化的領域で集団の独自性を維持するのみならず、「政治経済的領域での平等を可能にする」(梶田ほか, 2005, p. 298)ために行われるものだからである。すなわち、「権利」の要求それ自体が目的なのではなく、あくまで日常的に背負う具体的困難を解消するための手段なのである。加えて、従来の「参与条件」論は、スポーツへの参加をめぐる移民「個人」に対して降りかかってくる制約・困難の把握に傾斜してきた。そのため、移民の背負う困難とスポーツとの関連が「スポーツ参与」に関わる側面のみ議論されるにとどまっている^{注14)}。

よって、本稿はこうした先行研究から示唆を得つつも、移民のスポーツ実践を規定する条件を明

らかにするのみならず、彼らがそうした存在条件をどのように受け止め、またそれにどのように対処しているのかを問う。

その意味において、Doherty and Taylor (2007) の「スポーツへの参与のあり方と関わる移民の経験する社会的な困難の解決に、移民がどのように乗り出しているのかを明らかにする必要がある」(Doherty and Taylor, 2007, p. 51) という指摘は重要である。彼らは、カナダのオンタリオ州にある3つの高校を取り上げ、そこに通う移住してから6ヶ月—5年の青年(14—20歳)を事例に、スポーツを通じた移民の困難への対応の仕方を検証した。それによれば、移民青年たちはコーチや教師といった援助者(leader)を介して、ホスト国の人びとのスポーツグループに参加したり、また不慣れなゲームに参加するために必要なスキルやルールを理解を得たりしていた。それによってホスト国の文化的スキルを得られるスポーツへの参加が可能となっていた。こうしたことから、Doherty and Taylor は移民たちが困難へと対処する手段としてソーシャルキャピタルの蓄積に可能性を見ている。Walseth (2008) は、スポーツへの参与を通じて蓄積されるソーシャルキャピタルのうち、階級・エスニシティを越えて形成されるもの(bridging)に困難乗り越えの可能性があるという。それが「市民」としてホスト社会へ参画している(=統合)証であり、移民たちの生活の向上を意味すると考えるからである。しかし両者の議論においては、スポーツ参与に関することや個人的に解決が求められるもののみが移民の困難として捉えられるにとどまり、個人単位のネットワーキングによって解決可能な課題への対処の仕方しか議論されていなかった。

しかし、移民第1世代が定住化し、家族を形成して世代を重ねていく中でより解決が必要となる問題は、世代間(=家族内)で起こる問題といった移民諸個人では解決ができない。母国に戻っても仕事がなく、家族もおらず、住む家もないといった「容易に母国に帰ることができない」理由があって、移住先で暮らし続けなければならない人びとは、自分が移住先にどのように馴染むかの

表1 対象者およびその家族

世帯 番号	家族構成	店番 ¹⁾	施設利用		職業		居住地	備考
			個人・チーム(大人)	スクール(子ども)	BFC 滞在	言語能力 ²⁾	職種・学校	就業形態
1	カヨコ(母:38歳)	☆(月:17:00～20:00)		月・木 (9～10歳クラス)	平日	日本語:日常会話程度 日本語:○ ポルトガル語:聞ける が話せない	食品加工(太田市)	派遣
	ジュニニーニョ(息子:10歳)						町内公立小学校	学生
2	セサル(父:46歳)	☆(火:16:30～19:00)		火・水・土 (12歳～6歳クラス)	平日	日本語:単語での会話 ポルトガル語:聞ける が話せない	自動車組立(太田市)	派遣
	トシコ(母:45歳)						パチンコ台製造(大泉町)	派遣
3	ファビオ(息子:12歳)			火・水・土 (12歳～6歳クラス)	平日	日本語:○ ポルトガル語:聞ける が話せない	町内公立小学校	学生
	ジュニオール(息子:6歳)						町内公立小学校	学生
4	エジソン(父:33歳)	☆(水:18:00～22:00)	水:22:00～24:00			日本語:日常会話程度 日本語:○	自動車組立(太田市)	派遣
	カーチャ(母:31歳)		日:20:00～22:00				弁当づくり	派遣
5	ブルーノ(息子:2歳)						ブラジル託児所(大泉町)	
	マリオ(父:50歳)	☆(木:17:00～22:00)	月・金・土:20:00～			日本語:○ 日本語:○	自動車部品(大泉町)	派遣
6	ダイゼ(母:40歳)			火・水・土(12歳～)	平日	日本語:○ ポルトガル語:聞ける が話せない	家電部品製造(館林市)	派遣
	ユータ(息子:15歳)						町内公立中学校	学生
7	カンナ(娘:14歳)			水・木・土 (7～11歳クラス)	平日	日本語:○ ポルトガル語:○	町内公立中学校	学生
	ヘジナウド(父:43歳)	☆(金:18:00～22:00)	月・水・木・土:20:00～			日本語:○ 日本語:○	自動車部品(前橋市)	直接
8	ロザーナ(母:30歳)			月・水・木・土 (9～10歳クラス)	ほぼ毎日	日本語:○ ポルトガル語:○	未就労	学生
	カチュー(息子:10歳)						町内公立小学校	学生
9	ガヴィ(娘:7歳)			水・木・土 (7～11歳クラス)	ほぼ毎日	日本語:○ ポルトガル語:○	町内公立小学校	学生
	ハルユキ(息子:1歳)							
10	エジバウド(父:48歳)	☆※(土:日:9:00～18:00)				日本語:日常会話程度 日本語:○	ブラジル学校 (太田市・大泉町), BFC	非常勤・自営
	ミチコ(母:31歳)			月・水・木・土 (9～10歳クラス)	ほぼ毎日	日本語:日常会話程度 日本語:○	ブラジル学校 (太田市・大泉町), BFC	非常勤・自営
11	ジョン(息子:10歳)			月・水・木・土 (9～10歳クラス)	ほぼ毎日	日本語:○ ポルトガル語:○	町内公立小学校	学生
	アントニー(息子:3歳)				平日			
12	カーメン(母:38歳)					日本語:単語での会話 日本語:○	自動車部品(大泉町)	直接
	ビットルウーゴ(息子:14歳)				ほぼ毎日	日本語:日常会話程度 ポルトガル語:○	町内公立中学校	学生

母子家庭。平日は店番
担当に家まで送り届け
てもらっている。

隔週で日勤と夜勤が入
れ替わる(ヘジナウドは平日
ト)。ロザーナは平日
日中は息子と在宅。

エジバウドは施設の創
始者。2011年12月18
日現在、ミチコがブラ
ジルへ帰国しているた
め、ロザーナが土日も
担当。

母子家庭。BFCの運
送の仕事(街乗補助
ゼッケン・コート内清
みの洗濯、コート内清
掃等)を手伝う。

表1 つづき

世帯 番号	家族構成	店番 ^{†1}	施設利用		職業		居住地	備考
			個人・チーム(大人)	スクール(子ども)	BFC 滞在	言語能力 ^{†2}	職種・学校	就業形態
8	カルロス(父:47歳)		土:20:00～22:00			日本語:○ ポルトガル語:○	自営業 (住宅リフォーム・修理)	自営
	ヨーコ(40歳)	☆※(水:18:00～22:00)				日本語:日常会話程度 ポルトガル語:○	家電部品製造(館林市)	派遣
	ハルミ(娘:17歳)					日本語:日常会話程度 ポルトガル語:○	公立高校(館林市)	学生
	ジョーイチ(息子:14歳)			火・水・土(12歳～)	火・水	日本語:○ ポルトガル語:○	館林市公立中学校	学生
	アケミ(娘:12歳)			水・水・土 (7～11歳クラス)	火・水・土	日本語:○ ポルトガル語:聞ける が話せない	館林市公立中学校	学生
	シンジ(息子:8歳)			水・水・土 (7～11歳クラス)	火・水・土	日本語:○ ポルトガル語:聞ける が話せない	館林市公立小学校	学生

†1: 店番の担当者には「☆」を付し,「備考」の事情により現在担当から外れている者には「※」を付した。
†2: 意思疎通がほぼ完璧にできる者には「○」を付し, それ以外の者には能力の程度を表記した。
[2011年11月現在。氏名は全て仮名。観察と聞き取りより筆者が作成した。]

表2 BFC のスケジュール

曜日/時間	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00	1:00
月						レンタル(日本人) 11:00～14:00					7～8歳 17:30～18:30	9～11歳 18:30～20:00	個人参加(ベルー) 20:00～22:00	個人参加(ブラジル) 22:00～24:00				
火		ブラジル学校 9:00～10:00					ブラジル学校 14:00～15:00				3～6歳 17:15～18:15	12歳～ 18:30～20:00	個人参加(ブラジル) 20:00～22:00					
水		コートレantal(日本人) 9:00～10:00					ブラジル学校 14:00～15:00				7～8歳 17:00～18:30	9～11歳 18:30～20:00	個人参加(ブラジル)20:00～22:00					
木		ブラジル学校 9:00～10:00					ブラジル学校 14:00～15:00				3～6歳 17:15～18:15	6～11歳 18:30～20:00	個人参加(ブラジル) 20:00～22:00	BFC-KOWA 22:00～24:00				
金												個人参加(ベルー) 18:30～20:30	コートレantal(日本人) 20:30～22:30	個人参加(ブラジル) 22:30～1:00				
土			個人参加(ブラジル) 9:00～11:00		4～8歳 11:30～12:30	9～11歳 12:30～14:00		12歳～ 14:00～16:30				個人参加(ベルー) 18:00～20:00	個人参加(ブラジル) 20:00～22:00	個人参加(ブラジル) 22:00～1:00				
日		個人参加(ボリビア) 8:00～10:00				BFC 主催のアットサルリーグ・大会 10:00～18:00						個人参加(ブラジル) 18:00～22:00						

†1: 水曜日の19:30～21:00の中学生の練習は、町内にある中学校の体育館で行われている

みならず、定住して世代を重ねていこうとすると、次世代の自分の子どもたちをどのように育てていくかという育児・教育といった個人で解決が不可能な問題をどうしても避けて通れないからである。しかし、こうした個人では解決しきれない課題をソーシャルキャピタル論は扱うことができない。よって、当該家族でも解決が不可能な問題やコミュニティレベルでの課題解決にどのように取り組んでいるかを議論する必要がある。

5. 本稿の視角と方法

こうした問題意識から、本稿では、日本における日系ブラジル人の代表的な集住地であり、かつ在住者の「家族化」傾向が顕著に見られる群馬県大泉町^{注15)}を事例地とし、町内にある子どもから高齢者まで多世代の日系ブラジル人たちが集う「ブラジル・フットサル・センター」（以下、BFC）を取り上げる。日系ブラジル人の手によって作られた日系ブラジル人のためのこの施設は、フットサルのプレーのみならず、飲食、会議、テレビ観戦、待合場等さまざまな利用されているが、いうならばスポーツ空間がコミュニティ再生の場へと変容している。先行研究では移民個人の「権利の保障」という視点からスポーツ参加の条件改善の必要性が理念的に論じられてきたが、本稿は移民による「スポーツ」の生活化という視点からこのエスニシティにもとづくスポーツ

実践の分断を検討する。ここでいう「スポーツ」の生活化とは、「スポーツを生活課題の解決のための手段とし、日常生活の一部として継続的に実践すること」をさす。本稿は、移民が自分たちの生活課題の解決を目指して「スポーツ」を生活化している事実の中から、彼らの日常生活を再編する力を探ろうとするものである。

本稿で用いるデータは、筆者が2008年7月から2011年11月の間にさみだれ式にBFCへ通い行ったフィールドワークと資料に基づいている。調査は、各曜日・各時間のBFC利用者やその家族・友人、施設の運営者、所有者、施設内にある軽食店に関わる人びと、およびBFC周辺で暮らす地域住民への日本語およびポルトガル語の通訳を介してのインタビューを行った。なお、本稿でブラジル人個人を取り上げる際の名前は、全て仮名で表記した（表1）。

Ⅲ. BFCにおける日系ブラジル人

1. BFCの概況

BFCは、1990年に出稼ぎ目的で来日した日系ブラジル人のエジバウド氏と弟のダニエル氏によって1998年12月に設立されたフットサル施設である。大泉町南部の工業団地内の一角に位置する空き倉庫を改装して作られた屋内施設で、そこから南に5分ほど歩くと埼玉県との境にある利根

※上記以外には、平日の午前・午後の一部時間をブラジル学校が体育の授業で利用

図1 BFCの内部構造

■子どもの内訳：
 ・ブラジル・ペルー人：約15～20名
 ※内、日本の学校通う子ども：約15名、ブラジル学校など：～5名
 ・日本人：0名（全てすぐに帰宅する）
 ※他の親の迎えに便乗する子どもや軽食店の女性による送迎を利用する子どももいる

図2 BFCに残る子ども

川に直面する場所にある。2011年11月現在、BFCは主に、①「個人参加」^{注16)}、②子どものフットサルスクール、③レンタルでのコート使用、④ブラジル学校の体育授業、⑤施設所属のフットサルチームの練習等に利用されている（表2）。また、この施設内にはフットサルコートの他に、ブラジルの料理や飲み物を売る軽食店がある。そこは現在、女性5名で運営されている（図1）。

平日は練習開始時間の前から子どもたちが集まり、練習後も大人の「個人参加」の横で、夜遅くまで施設に残って遊んでいる姿が見られるのがこの施設の日常の光景で、ほとんどがブラジル人の子どもたちである（図2）。休憩時間中や練習後に施設内に残る子どもたちは、日本人とブラジル人それぞれ別れて遊んでいるのが目立つ。子どもたちはお互いの名前や通っている学校・学年等は知っていて、階段や通路ですれ違ったり軽食店前のフロアで電子ゲームをしたりする際に両者は時々会話することはある。しかし、施設内で一緒に遊んだり、練習日以外に施設の外で会ったりといった日常的なつきあいはほとんどない。

子ども同様に、大人同士でも日本人とブラジル人たちの間の関係は希薄である。彼らと日本人たちの関係も、個人参加時に多少会話を交わす程度でしかなく、異文化交流とは言い難い。施設や各グループが参加者を制限してはいないため、各時間に時々日本人が数名参加したこともあるが、継続的参加にまで至った例は皆無である（表2）。

2. BFCに集う日系ブラジル人の概況

(1) 日系ブラジル人の来日・就労・居住過程
 このフットサル施設を利用する日系ブラジル人

たちのほとんどは、大泉町と隣接する太田市近辺から集う^{注17)}。来日後、彼らのほとんどが製造業関連の大手メーカーの工場やその下請会社等に就職した。彼らの来日・就職ルートは大きく分けて2つある。1つは「市場媒介型移住システム」と呼ばれる、母国で渡航斡旋会社と契約し旅費を会社から借り受けて来日するパターン。渡航斡旋会社が移動先での派遣会社も兼ねている場合がほとんどで、最初の勤務地で約半年間働いて借りた旅費の返済を行うことから始まる（梶田ほか、2005）。もう1つは、既に渡航し就労している親族・友人に呼び寄せられて来日する「相互扶助型移住システム」というパターン。渡航斡旋会社と契約しない限り、自費で旅費を賄わなければならないため、渡航段階で多額の資金が必要となる。来日後、就労する際には派遣会社を通じて行うことがほとんどである（梶田ほか、2005）。

住居に関しては、会社がアパートを借りそれを社宅と称して労働者に提供しているが、彼らはそれをあまり利用しない。その理由は以下の点にある。

会社が提供する社宅は、基本的に「一人暮らし用のワンルーム」であり、滞日が長期化し次第に家族をかまえつつあるブラジル人たちには全く魅力的ではない。これは、会社側が労働者に「単身であること」を前提としているのであり、短期的不安定就労者として彼らを遇していることによる。すなわち、会社が求めるのは、定着する労働者ではなく、突然の職場配転や勤務地移動をいとわない労働力の方である。それに適合的なのは子どもの教育をはじめとする家族生活にかかわる「足かせ」の少ない単身者の方である。

(2) 日系ブラジル人の就労条件とBFC利用との関係

マリオは、大泉町内にある自動車部品の工場で働きながら、主に月・金・土にBFCへとやってくる。彼の勤める工場では、日勤と夜勤が1週間おきに入れ替わる「2交代」制が敷かれており、勤務時間は日勤が6:30—20:00、夜勤が16:30—4:30となっている。そのため、彼は隔週でしか来られない。現在の職は派遣会社を通じて得

表3 「個人参加」の時間・曜日ごとのグループの推移と施設に残る子どもとの関係

参加者の中心属性	曜日・時間	年					備考	残っている子どもの概数	前の時間の使用者	参加リーグとチーム名
		2007	2008	2009	2010	2011				
1 ベルuer人	月：20:00~22:00							5~10人程度	9-11歳クラスの子ども	CONTIGO PERU: VETERANOS
	金：18:30~20:30						2011年10月半ばまで	~5人程度	なし	
	土：18:00~20:00							~5人程度	なし	Alianca PERU: Bronze
2 ブラジル人①	水：20:00~22:00						2010年8月から	~5人程度	9-11歳クラスの子ども	
3 ブラジル人②	火：20:00~22:00						2009年から	15~20人程度	12歳以上のクラスの子ども ※その前が9-11歳クラスの子ども	
4 ブラジル人③	金：22:00~24:00						ブラジル学校の在学・卒業生が中心	ほぼ無	ベルー人個人参加	INTER FS: Prata
	月：20:00~22:00							2・3人程度	9-11歳クラスの子ども	BFC PARALELO (BRASOFT) FS: Bronze
5 ブラジル人④	火：22:00~24:00							15~20人程度	ブラジル人②個人参加	BFC NIPPON: VETERANOS
	日：20:00~22:00							15~20人程度	レンタル or ブラジル人個人参加	
6 ブラジル人⑤	土：20:00~22:00						BFC 開設以来の利用が継続（約10年）	15~20人程度	ベルー人個人参加	ELITE FS: Plata
	土：22:00~24:00							15~20人程度	ブラジル人⑤個人参加	ELITE MASTERS FS: Bronze, VETERANOS
7 ブラジル人⑥	月：22:00~24:00							2・3人程度	ベルー人個人参加	COMERCIALES FS: Bronze
	土：9:00~11:00							ほぼ無（利用者の子どもが 数名いる程度）	なし	
8 ブラジル人⑦	水：20:00~22:00						東日本大震災以後、節電令発令期間中	~5人程度	日本人個人参加	SEM QUERER FS: Bronze
	水：9:00~11:00							ほぼ無（利用者の子どもが 数名いる程度）	なし	

ているため、「勤め先の景気判断によって、常に、いつでもクビになりうる」状況にある。過去に、契約期間を満了する前に雇止め合い、失業保険すらもらえなかった経験が彼には何度もある。日本人従業員とは異なり、時給制で昇給等が期待できないため「仕事（残業）があるときに稼げるだけ稼ぐ」のである。太田・大泉周辺の工場はほとんどが24時間稼働しており、「2交代」や「3交代」制のシフトを敷いている。こうした工場労働に見られる特有のシフト制や時間形態が、BFCにおける曜日・時間ごとの参加者に、各々の労働条件が類似する人同士で固定することを強いているのである（表3）。大人たちの集まる各曜日の各時間のほとんどが、誰でも個人単位で参加できる形式（個人参加）をとっているが、実際は参加者が固定している時間帯がほとんどである。BFCでは毎週日曜日に年間を通じてリーグ戦を行っているが、それに参加するチームのほとんどが、この個人参加の曜日と時間が単位となったチームであることが上述したことの証左である（表3）。

（3）「共働き」の選択とBFC利用との関係

昇進の可能性が閉ざされた存在かつ切り捨ての容易な労働力としてある彼らは、景気変動の波に対する緩衝装置として市場では位置づけられてきた（西澤，1995，p. 132）。そうした調整弁としての生活の不安定さに抗うために、彼らは夫婦でそれぞれ異なる派遣会社を通して職を得たり、職種を別にしたりする共働きのパターンを取る。しかし、この「選択」は家族員の生活構造に大きな規定力を発揮する。

先のマリオたち夫婦もこの共働きの形態を取っている。妻のデイゼは、館林市で家電部品の製造工場で朝9：00から18：00まで、繁忙時は20：00まで勤務し、休日は会社から金・日と決められている。彼らには中学3年の娘のカンナがいるが、下校する17：00から両親が帰宅する21：00過ぎまで、彼女は週に4日はたった1人で過ごさざるをえない。よって両親は、カンナの「安全確保」のために、平日は学校が終わったら必ずBFCに行くように指示している。BFCは「夜遅

くまで安心して子どもを任せられる場所」（デイゼ，40歳，女）だからである。こうした状況はマリオたちに限らず、子を持ち、製造業関連会社で働くブラジル人の親たちに共通する態度である。

3. 親と子の間の世代間格差

また、大人たちの間では、子どもが「母国文化から縁遠くなっている」という問題も、子預け仲間の親たちの間では大きな生活課題として共有されている。特に、日本の公立学校に子どもを通わせている親の中で、「子どもが毎日日本語漬けになってしまって、だんだん会話するのが難しくなってきた」（カーメン，36歳，女）というように、言語的問題となりつつある。

現在、太田・大泉周辺には公立学校の他に、ブラジル学校が5校ある。2011年11月現在、五校すべてがブラジル政府から認可を受けており、ブラジルの就学規則に則ったカリキュラムが組まれ、言語をはじめとして母国文化を下敷きにした教育が実施されている。しかし、母国文化を中心に学ぶブラジル学校は、日本の公立学校と比較して学費が高い。毎月の授業料は1人当たり25,000円から40,000円程度に設定されており、さらに教材費や給食費、送迎費等は別立てで徴収される^{注18)}。こうした出費は、時給1,100—1,300円程度で働き1ヶ月約25万円で暮らしを立てている彼らの家計の大きな部分を占めることとなり、3,000—5,000円/人・月程度で済む日本の公立学校と比べて経済的負担の大きさはいうまでもない。それ故、子どもを日本の公立学校にやむなく通わせた結果、「日本語漬け」状態となり親子間のコミュニケーションに不都合を生じ始めている。自らの生活戦略として将来を見越し、日本語や日本の生活習慣の習得によって、子どもの将来の暮らしをより開かれたものにするために公立学校に通わせている親も少なからずいる^{注19)}。しかし、両親や他の家族を母国に残している人たちも多く、「もし何かあったら帰国する」（ヘジナウド，41歳，男）とも語ることから、日本への定住化を決断するに至ってはいないことを知る。それ故、大変アンビバレントな心的状況に未だおり、

母国文化の中でも特に「母国語」を捨て去ることの恐れは強いものである。

Ⅳ. 文化的セーフティネットとしてのBFC

1. 言語問題の解消をめざした実践

日本の学校に通うブラジル人の子どもたちが母国語や母国文化との接点を持つ機会は、家庭以外には日常的にほとんど確保できないのが現実である。しかし、家計を支えるために両親は夜遅くまで働きに出ており、家庭では母国語や母国文化の環境を設けられない。そのため、親たちは、家庭以外で日常的にそれを確保することが必要であると感じており、同年代の子ども同士のつながりではなく、特に、ブラジルで育ち母国文化を身につけた大人たちの中に子ども達を浸らせたいと思っている。親たちは「母国文化から縁遠くなってしまった子どもたち同士がつながりをもっても、ますます会話ができなくなるだけだ」（セサル、46歳、男）という。ブラジル人中心に運営されているかつ幅広い世代の人びとが集まるBFCは、その絶好の場を提供する。

BFCにおいて、親を待つ間、子どもたちは2階の小スペースやお店の前のフロア、もしくはフットサルコート内で時を過ごす。彼らはすすんで大人たちに割って入り、フットサルの試合にも、ベンチ・フロアでの大人たちの会話にも、容赦はしない。しかし、大人たちと子どもの会話の多くは、ポルトガル語と日本語が入り混じっている。大人の方からポルトガル語で話しかけると、子どもの返答は日本語である。親のポルトガル語を聞いて内容は理解できるが、ポルトガル語で返せない子が多くなった。だから、「ポルトガル語で話さない」とたしなめられている光景は日常茶飯事である。うっとうしい大人から離れて、子どもたちは気兼ねのない友達同士で集まろうとする。大人たちは「ブラジル語、ブラジル語ってうるさい」（カチュー、10歳、男）のである。そんな「うるさい」親たちは、できるだけ子どもたちと接点を持つとあるので、フットサルのプレー中

に子どもが「乱入」してくることをむしろ望んでいるようだ。大人の見学者たちも「邪魔しちゃダメよ」と一応声はかけるが、コートから子どもたちを連れ戻したり、外に追いやったりは絶対にしない。というより、輪に入らずゲーム等をしていようものなら、大人たちの方からフットサルの試合に強引に入れられたり、話の輪に引き込んだりする。子どもをBFCに残す親たちは、「日本で暮らしている以上、日本語や日本の文化を学んだ方が、子どもの将来の可能性が広がる」（ロザーナ、32歳、女）と判で押したようにいいながらも、スクールが終わっても施設に残る子どものほとんどが日本の公立学校に通っているブラジル人であることを見れば（図2）、親たちの心の中が透けて見えるのである。また、合わせて重要なのは、曜日・時間ごとにBFCに残っている子どもの数にばらつきが見られることである。表3はそのばらつきと各曜日・時間との関係を示している。子どもが特に多く残るのは火曜日と土曜日である。この日の使用者は家族で暮らしている40歳代以降の人が大多数を占めている。一方、水曜日や金曜日にも同じくブラジル人が多く参加しているにも関わらず残る子どもが比較的少ないのは、当曜日・時間の利用者が「学生」や若い独身男性（単身者）が多くを占めるからである。日本で育ち長い時間を過ごしてきた「学生」やいつ居なくなるか分からない「単身者」の曜日・時間ではなく、BFC開設以来変わらないメンバーで続けている日本での家族生活を長く経験している人びとが集まる曜日・時間の方に、より多くの子どもたちが預けられている。

2. 世代間交流の場の維持・継続

家計を支える上で両親の共働きは必須であり、日常的に過ごす時間が確保し難い状況を彼ら家族に押しつける。また、日本の公立学校では学べない、母国語をはじめとする母国文化はブラジル学校で学ぶことができるが、国からの公的補助を得られない「私塾」であることが多く、そのためとても払えない額の学費を払う必要があり、それは必然的にブラジル人たちの不安を極限化するの

ある。それは親子間の会話が成り立たないというレベルを超えて深刻化している。この状況下で、BFCは母国文化を身につけた大人たちと子どもたちが触れ合うことのできる唯一の場なのである。

BFCに残る子どもの多くは、小学校低学年から幼稚園児であり、これらの子どもたちと交流を行うことと同時に、彼らの面倒を見る役割が重要となる。カンナがそうであったように、親たちが仕事を終えて迎えにくる時間まで子どもを「看視」する必要もまたあるからである。特に、BFCの周辺は交通量が多く事故が起こる危険度の高い場所であるため、夜間には急に外に飛び出して事故にあわないよう目を光らせる。この重要な役回りはBFCの施設内にある、軽食店で働く女性たちが担う。彼女たちは店のカウンターに立つだけでなく、時にフロアに出てきて子どもと遊んだり、迎えに来た親やフットサルをしに来た友人らと会話に興じたりしながら、常に子どもに目を配ることを忘れない。また、親が迎えに来られない時には、ワゴン車で子どもを家まで送ることさえある。

しかし、彼女たちが担う役割は、子どもたちの安全の確保にとどまらない。彼女たちが自らその仕事を引き受ける理由は、彼女たち自身も子どもをBFCに預ける当事者であることにある。以前BFCを経営していた人がスクールコーチをやりつつ店の営業を兼務していた時は、その彼が子どもの面倒見役も引き受けており、彼女たちは自分たちの仕事が終わるまで子どもをBFCで見てもらう側だった。しかし、前任者が辞めて、彼女たちは非常に困りはてた。また、日本語がほとんどできない他の親たちからの依頼もあった。自分が引き受けようにも、お店には日本人の子どもやその親もやってくるので、どうしてもある程度の日本語能力が必要な事情もあった。しかし、それ以上に、依頼した親たちもまた日本での就労状況の不安定さを身をもって体験しており、いずれ帰国せざるをえないかもしれないので、子どもたちにはブラジル文化を捨てさせるわけにはいかなかったのである。とはいえ、費用のかかるブラジル学校に通わせることはどうしても難しく「やむなく」日本の公立学校を選んでいたのである。子どもが

日本の学校に通うことで母国語がだんだん理解できなくなっていたことと、言葉の問題で親子間のコミュニケーションにすら支障をきたし始めていたことを、仕事を引き受けた彼女たちも危惧していた。軽食店にやってくる日本人への対応ができるということよりむしろ、日本語でコミュニケーションが取れ、かつ母国文化も体现する彼女たちが、日本語をあまり理解できない大人たちと、ポルトガル語は聞いて理解できても返答が日本語でしかできない子どもの間に立ち、「先生役」となったのである。彼女たち自身も子どもを日本の学校へと通わせている親でもあり、このBFCという空間が持つ唯一無二の重要性を理解しているが故に、「子どもの面倒を見る」店の仕事を引き受けたのである。

しかし、彼女たちが「先生役」となったからといって、子どもたちの様子が劇的に変わったわけではない。実際に行われているやり取りは、相変わらず大人がポルトガル語で話しかけ、それに子どもが日本語で応答するというやり取りがほとんどである。けれども、子どもと大人が接点をもてる場所があることを「先生役」を担う女性たちも子どもたちをBFCにおいている親たちもともに言葉に出すことはないが、帰国への可能性を残すセーフティネットと目している。それは、いつか帰国せざるをえなくなった時のための「事前の備え」や「身構え」(＝セーフティネット)のことである。前任者が2009年に辞めて以来、仕事や家庭の状況に強く影響されながらも、担当者を変えつつ今まで軽食店の運営を継続し続けていることの裏にある切実さを、明るく振舞う彼女らの日常から知る由もない^{注20)}。

V. おわりに

本稿は、エスニシティにもとづくスポーツ実践の分断を、移民による自分たちの生活課題の解決を目指した、スポーツを通じた日常生活の再編として把握することを試みてきた。労働者としての日系ブラジル人たちは、市場において、切り捨ての容易な景気変動の波に対する緩衝装置として位

置づけられている。それは居住者としての日系ブラジル人たち、特に就学年齢の子を持つ親たちに育児の問題を突きつけた。家族で暮らすために選択せざるを得ない共働きが、親の不在のあいだの子どもの面倒をどうやってみるかという問題として、また就労条件が子どもたちを母国文化、特に「母国語」から遠ざけてしまい家族の近未来への強い不安を生活問題として顕在化させていた。

こうした、市場の論理（労働のグローバリゼーション）によって強いられる生活課題に対し、彼らはBFCというスポーツの場を利用して創造的に対処していた。スポーツの場には多世代のブラジル人たちが集まっており、そこでは母国文化を身につけた大人と子どもとの様々な「つきあい」が見られた。また、母親たちによる軽食店の運営への参画は、子育て問題を共有する仲間同士による生活課題解決のための実践であり、かつまた言語問題ひいては近未来への「事前の策」でもあった。よって、市場からくる圧倒的な「単身化圧力」がもたらす不安に直面しつつも、その問題を何とか解決し日常生活を再編しようとする際、BFCはセーフティネットとして位置づいているのであり、また日系ブラジル人同士で集うことによってそれが可能となっているのである。

エスニシティにもとづくスポーツ実践の分断はこれまで、移民たちの生活を脅かす「同化の失敗」や「エスニシティの保持」の有効な手段や場、移民として背負う日常的困難が生み出すスポーツへ参与する「権利」の剥奪状況と捉えられてきた。しかし、これらの議論は、スポーツへ参与する単位や日常的困難を抱える単位を「個人」に据えて問題を捉えていたために、滞日生活が長期化し家族形成が進みつつある日系ブラジル人の暮らしの現実が捉えられていなかったばかりか、個人では解決しきれない課題に家族や仲間集団さらにはコミュニティレベルで解決に向かう取り組みを、移民の地位や就労市場内における不平等を脅かすことのない実践として切り捨ててしまう危険性すら孕んでいた。そこで本稿では、分析単位を「個人」から家族やコミュニティといった「集団」にまで広げることによって、はじめて浮かび上がってく

る移民の日常的課題と彼らのスポーツ実践との関係に焦点をあてた。それによって、ブラジル人たちの生き抜き戦略は「組織の発展性とメンバーの固定性に欠けたもの」（西澤，1995，p. 150）であるという従来からの知見や、ブラジル人たちにとってのスポーツは「滞日基盤の安定や生活の余裕を反映する活動」（梶田ほか，2005）だとしてきた知見とは異なる現実を浮かび上がらせた点に本稿の意義がある。「個人」単位で得られる利益ではなく、個人が背負い込む「家族的な代償 familial costs」（Carter，2007，p. 376）を捉えることが、移民のスポーツ実践研究に新たな知見をもたらすために重要な視角となるといえよう。

注

- 注 1) 本稿は、梶田ほか（2005）に倣い、法的・政策的な構築物であることを示すときに「日系人」と表記し、就労・生活実態を表すに際しては「ブラジル人」と表記して区別する。両方の意味を持たせる時には「日系ブラジル人」とする（梶田ほか，2005，p. 3）。また、「移住」は「人びとが国境を越えて移り住むこと」と、「移民」は居住地を変えた人々のことを、そして「エスニシティ」は「特殊なエスニック集団への帰属の状態およびエスニックな自己意識」と定義して本稿では用いる。
- 注 2) 日系人たちが組み込まれた産業構造のあり方や、その中において彼らには劣悪な雇用条件が突きつけられていること（＝労働問題）が繰り返し指摘されてきた（渡辺，1995；梶田・伊豫谷編，1992；西澤，1995；大久保，2005）。
- 注 3) その代表的な例として団地へのブラジル人集住が引き起こす問題（都築，1995）や外国人子女の教育問題（小内編，2009）がある。
- 注 4) 1980年代後半以降に地域問題としての外国人問題が登場する背景には、都市化や都市的生活様式の進展が引き起こした郊外化がもたらした都市インナーシティの空洞化（＝地域崩壊問題）があり（奥田，2004）、その隙間へと外国人たちが流入していった。こうした、地域における外国人問題の背景にある地域崩壊問題への有力な解決手段として、スポーツが期待を集め政策的な後押しを受けてきたことについては伊藤・松村（2009）を参照。
- 注 5) 例えば、愛知県では、県の国際化多文化共生推進室が中心となって、「多文化共生社会づくり推進事業」として多文化交流や相互理解を企図した

スポーツ活動への支援が行われている（愛知県，online）。しかし，こうしたスポーツの社会形成機能への政策的期待は，社会体育，コミュニティ・スポーツ政策を通じて根強いが，「アセスメント」がなされたことは未だない。

注 6) 「我が国の文教施策」（文部省：1988—2000年度），「文部科学白書」（文部科学省：2001—2011年度）においても，国際交流の手段としてのスポーツは理念的に意義づけられている。

注 7) 「場」の概念については，現象学の立場（レルフ，1999），資本の量一方向（文化資本＋経済資本）という社会空間上の位座として把握する立場（ブルデュー，1990）等がある。本稿で「スポーツ実践の場」というときの「場」は，物理的空間に引きつけて理解している。

注 8) 例えば，「主役」の日系人チーム参加激減 日伯サロンサッカーリーグ/愛知」（朝日新聞：愛知版，1999年1月12日）。

注 9) 注 5 でも述べたように，日本の当該地域で新たに浮上した外国人問題をふまえた議論が未着手である以上，日本に先んじて多文化化が展開した国々における移民とスポーツに関する議論を，あくまで当該社会の現実に対する調査の積み重ねから生まれたという経緯を踏まえつつも，ここで検討することは有効であると考ええる。

注 10) 仲正（2008）によれば，「公民権運動」とは，「交通機関やレストラン，学校等の公共の場で白人と黒人を分離することや，識字率が低い黒人の投票権を事実上制限すること」（p. 65）に対する，黒人を中心とした平等を求める権利主張運動をさす。また，「アフーマティブアクション」とは，「大学等への入学や政府系機関への採用に際して，女性や黒人等のマイノリティを優遇する」（p. 70-71）積極的是正措置をさす。

注 11) ゴードンは「同化」を7つに分類（構造的，文化的，婚姻，帰属意識，態度受容，行動受容，市民）した上で，少数者集団のメンバーが多数者集団の派閥やクラブや制度の中へ大規模に入り，第一次的関係を築くという「構造的同化」と，少数者集団の行動様式と文化様式が彼らの所属する社会の多数者集団の行動様式と文化様式に類似して行く「文化的同化」を重視した（ゴードン，2000）。

注 12) こうした展開の一方で，移民をめぐるホスト・ゲスト関係にポストコロニアル遺制を見，支配-従属関係の再生産過程分析の必要性を主張したのは Birrel（1989）である。Birrel によれば，従来の議論が，移民がスポーツを通じて同化するか否

かという「結果」ばかり注視し，それを左右するはずの条件自体には注目してこなかったという。

また，この「結果」論が移民たちのホスト社会への参画を前提としており，そのため同化論はいうにおよばず，「文化の多様性の承認」という主張も「ホスト社会における法や政治的経済的システム下に従って行動する限りにおいて認められるに過ぎない」（Birrell, 1989, p. 217）ことになってしまおうという。

注 13) メキシコ系アメリカ人たちは，アウトドアレクリエーションや激しいスポーツ活動には積極的には参加しない一方で，家族と一緒に友人を訪ねたり，家でリラックスしたり，子どもと一緒に遊んで過ごしたりすることを好む（Murdock et al., 1990）。また Hutchison（1987）も，移民家族の中でも，女性や子ども，高齢者たちが一緒にレジャー・スポーツ活動に参加することが多いと述べている。こうした傾向について Chaves（1992）は，自分たちが「メキシコ系」であるという民族意識（＝エスニシティ）が影響している点を示唆している。

注 14) こうした考え方は，スポーツを通じて移民はよりよい暮らしの基盤を確保するどころか，そうした困難の存在を放置・追認してしまうことになる可能性を孕んでいる。西澤（1995）は，神奈川県愛川町のサッカーリーグに参加する日系人チームを取り上げ，「エスニック・カテゴリーを用いて集合することで，日本社会への参加を可能なものとする」（西澤，1995, p. 151）事例であると述べている。しかし，こうした社会参加は限定的であるという。「ただ，その社会参加の途が，『住民』という抽象的で部分的な日系人の一側面に限って開かれていることは言い過ぎて足りないことはない。『住民』としての日系人に限定するならば，日系人が不平等の構造を脅かすことはないのである」（西澤，1995, p. 151）。

注 15) 本稿と同じ事例地において，柔道への参加が日本社会へのブラジル人の同化にいかに関与するかを問うた先行研究に Ito et al.（2011）がある。移民が参与するスポーツが，ホスト社会の伝統的スポーツか否かによって移民の同化過程は大きく左右されるという知見を新たに示したが，しかし従来の「同化研究」の延長線上に位置づけられるものであり，結局，ブラジル人たちが日本で暮らす上で被る困難とスポーツ実践の関係は問われないままであった。

注 16) 「個人参加」とは，チームやサークルに所属し

てプレーするのではなく、個人単位で集まりその場でチームを作ってフットサルの試合を行う方法のことである。

注17) 2012年4月1日現在、大泉町の外国人登録者数は6,288人で、総人口中の約15.3%を占める。ブラジル籍は4,396人で外国籍人口の約70%を占める(外国人集住都市会議, online)。

注18) 特に送迎費は、5,000円—10,000円追加でかかる。こうした高い学費が設定される理由は、教育機関に対する公的補助を受けられる各種学校や学校法人の認可を受けているブラジル学校が少ないため、学校の運営費を徴収する学費に頼らざるをえない実情があるからである。半日教育が基本のブラジル学校では一日いるためには更に学費を払わねばならず、子どもに母国文化を学ばせたい親には大きな負担となっている。

注19) 児島(2006)は親の滞在期間とその見通しの長短の違いから、学校選択のあり方を4つに分類(学校依存、リスク回避、リスク分散、現実直視)し、定住意識に基づいて日本の学校への通学の選択を「市場価値のある技能習得の奨励」と見、それを親たちが主体的に行う現実主義的な「戦略」であると述べている(児島, 2006, p. 73-110)。しかし、子どもが2人以上になると月額10万円近い出費を余儀なくされ、それが家計への重い経済的負担となるために困難や抵抗を親たちが感じているという岩本(2006)の指摘や、学費が学校選択の際のネックとなり日本の公立学校に通わせる親の方が多くなっている現実についての小内(2009)の指摘は重要である。家計に占める子どもの学費負担の大きさが、母国文化を学習するチャンスを限定している現実がある。

注20) 担当の曜日は、母親たちの間で、自分や夫の仕事の都合、家庭の事情等に合わせて決められている。担当日の都合が悪くなった際には代わりを立てたり、担当曜日を入れ変えたりして対応してきたという。

文 献

愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室。多文化共生社会づくり推進事業について。 <http://www.pref.aichi.jp/0000007725.html>, (参照日2012年7月31日)。
朝日新聞(愛知版)1999年1月12日朝刊。
Allison, M.T. (1979) On the ethnicity of ethnic minorities in sport. *Quest*, 31(1): 50-56.
Allison, M.T. (1982) Sport, ethnicity, and assimilation.

Quest, 34(2): 165-175.
Birrell, S. (1989) Racial relations theories and sport: suggestions for a more critical analysis. *Sociology of sport journal*, 6: 212-227.
ブルデュー, P.: 石井洋二郎訳(1990)ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ—社会的判断力批判—。藤原書店: 東京。
Carter, T.F. (2007) Family networks, State interventions and the experience of Cuban transnational sport migrants. *International review for the sociology of sport*, 42(4): 371-389.
Chavez, D.J. (1992) Hispanic recreationists in the wildland: Urban interface. *Trends*, 29(4): 23-25.
Cheska, A. (1984) Sport as ethnic boundary maintenance: A case of the American Indian. *International review for the sociology of sport*, 19(3+4): 241-257.
コークリー, J.: 影山健監訳(1982)現代のスポーツ: その神話と現実。道と書院: 東京。
Coakley, J. (1987) Sociology of sport in the united states. *International review for the sociology of sport*, 22(1): 63-75.
Day, R.D. (1981) Ethnic soccer clubs in London, Canada: A study in assimilation. *International review of sport sociology*, 16(1): 37-50.
Doherty, A. and Taylor, T. (2007) Sport and physical recreation in the settlement of immigrant youth. *Leisure/Loisir*, 31(1): 27-55.
Fronger, E. (1985) On ethnic sport among Turkish migrants in the federal republic of germany. *International review for the sociology of sport*, 20(1+2): 75-86.
外国人集住都市会議。会員都市基礎データ。 <http://goo.gl/ZR2R6y>, (参照日2012年7月31日)。
ゴードン, M.M.: 倉田和四生・山本剛郎訳(2000)アメリカンライフにおける同化理論の諸相: 人種・宗教および出身国の割合。晃洋書房: 東京。
Hutchison, R. (1987) Ethnicity and urban recreation: Whites, blacks, and Hispanics in Chicago's public parks. *Journal of leisure research*, 19: 205-222.
Ito, E., Nogawa, H., Kitamura, K., and Walker, G.J. (2011) The role of leisure in the assimilation of Brazilian immigrants into Japanese society: Acculturation and structural assimilation through Judo participation. *International Journal of Sport and Health Science*, 9: 8-14.
伊藤恵造・松村和則(2009)コミュニティ・スポーツ論の再構成。体育学研究, 54(1): 77-88。

- 岩本廣美 (2006) 日本におけるブラジル人学校の展開と児童・生徒の就学状況：群馬県邑楽郡大泉町の事例を中心に. 新地理, 54(3): 33-50.
- Juniu, S. (2000) The impact of immigration: Leisure experience in the lives of south america immigrants. *Journal of leisure research*, 32: 358-381.
- 梶田孝道・伊豫谷登士翁編 (1992) 外国人労働者論：現状から理論へ. 弘文堂：東京.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人 (2005) 顔の見えない定住化. 名古屋大学出版会：愛知.
- 児島 明 (2006) ニューカマーの子どもと学校文化：日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ. 勁草書房：東京.
- ブーリー, J.C. (1988) ミルウォーキーにおける少数民族サッカークラブ：同化の研究. ロイ, J.W. ほか編著：糸野豊編訳, スポーツと文化・社会. ベースボールマガジン社：東京, p. 255-270.
- McKay, J.P. (1975) Sport and ethnicity: Acculturation, structural assimilation, and voluntary association involvement among Italian immigrants in metropolitan Toronto. s.l.: s.n. 1975: Canada.
- Murdock, S.H., Backman, K., Colberg, E., Hoque, N., and Hamm, R. (1990) Modeling demographic change and characteristics in the analysis of future demand for leisure services. *Leisure sciences*, 12: 79-102.
- 仲正昌樹 (2008) 集中講義！アメリカ現代思想：リベラリズムの冒険. NHK ブックス：東京.
- 西澤晃彦 (1995) 隠蔽された外部：都市下層のエスノグラフィ. 彩流社：東京.
- 奥田道大 (2004) 都市コミュニティの磁場：越境するエスニシティと21世紀都市社会学. 東京大学出版会：東京.
- 小内 透編著 (2009) 在日ブラジル人の教育と保育の変容. 御茶の水書房：東京.
- 大久保 武 (2005) 日系人の労働市場とエスニシティ：地方工業都市に就労する日系ブラジル人. 御茶の水書房：東京.
- レルフ, E.: 高野岳彦ほか訳 (1999) 場所の現象学：没場所性を越えて. ちくま学芸文庫：東京.
- Ruble, C.B. and Shaw, S.M. (1991) Constraints on the leisure and community participation of immigrant women: Implications for social integration. *Society and Leisure*, 14: 133-150.
- Stodolska, M. (1998) Assimilation and leisure constraints: Dynamics of constraints on leisure in immigrant populations. *Journal of leisure research*, 30: 521-551.
- Tirone, S. and Pedlar, A. (2000) Understanding the leisure experiences of a minority ethnic group: South Asian teens and young adults in Canada. *Society and Leisure*, 23: 145-169.
- 都築くるみ (1995) 地方産業都市とエスニシティ：愛知県豊田市 H 団地における日系ブラジル人と地域住民. 松本 康編 増殖するネットワーク. 勁草書房：東京, pp. 235-281.
- Walseth, K. (2008) Bridging and bonding social capital in sport: experiences of young women with an immigrant background". *Sport, education and society*, 13(1): 1-17.
- 渡辺雅子編著 (1995) 共同研究出稼ぎ日系ブラジル人：就労と生活. 明石書店：東京.

(平成24年8月8日受付)
(平成25年4月22日受理)